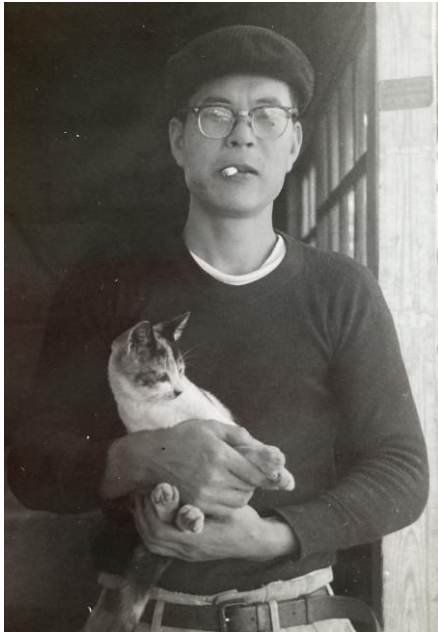


豊田 兼光氏 平和金箆製作所 創業者／箆職人

（話者：豊田 洋子氏 平和金箆製作所 二代目／箆職人）



豊田 兼光氏



タオルの風合いはタオルの製織技術によって決まるが、その技術を生み出すタオル織機の道具（部品）のひとつが「箆^{おさ}」である。今回のタオルびとは、今治で箆を専門に製作している平和金箆^{かなおさ}製作所とその創業者・豊田兼光氏である。今治にはかつて箆メーカーは3社あったが、現在は平和金箆製作所一社を残すのみとなった。

今は亡き兼光氏に代わって、このたびは後継者の豊田洋子氏に同社の歴史と兼光氏について語ってもらう。今治タオル工業の発展を「道具」として支えた箆の技術的変遷を振り返ると同時に、平和金箆製作所の歴史をたどっていく。

とよだ・かねみつ ☆ 1928年9月今治市蔵敷町生まれ。父親も箆職人であり、父親から技術を学び、実兄とともに豊田金箆製作所を創業。1959年に独立し、平和金箆製作所を創業。ひたすら箆製作に打ち込み、従来のシャトル織機用箆にくわえ、1980年代後半以降は革新織機用箆も製作するようになる。織機の技術が大きく変わるなかで、箆職人として産地のタオルメーカーを支えた。2012年4月に85歳でこの世を去るが、次女の洋子氏が二代目を継承し、平和金箆製作所を守ってきた。

1. 箴の歴史

『古事記』と『日本書紀』に登場する「箴」

まずは箴にまつわる歴史の話からはじめよう。

箴の歴史は織物の歴史とともに古く、『古事記』や『日本書紀』（または『日本紀』）に登場する。「記紀」と呼ばれるこれらの歴史書は、いずれも日本神話や古代史を記しており、飛鳥時代の天武天皇（在位：673～686年）のときに編さんが開始された。

『古事記』（上・中・下巻）は、日本古代の口承された神話や伝説を記録した「帝紀」および「旧辞」を^{ひえだのあれ}稗田阿礼が暗誦し、その内容を^{おおのやすまろ}太安万侶が文字化したものであり、712年に完成したと伝えられている。^{かみよ}神代から推古天皇の治世までを網羅しており、紀伝体で叙述されている点が『日本書紀』と異なる。

『日本書紀』（30巻）は、^{とねりしんのう}舎人親王らをはじめとする多くの人が編さんに関わり、720年に完成したとされる。神代から持統天皇までを対象とし、漢文・編年体で記された正史であるため、古代日本の歴史を知るうえで重要な史料となっている（『日本書紀』についてはいまだ多くの研究者がその内容について考証中である）。『日本書紀』の編さんにあたり、「帝紀」と「旧辞」も参照されたことから、『古事記』の内容と重なるところがある。「箴」が登場する神話も両書で似ている。ここでは、『日本書紀』の箴にまつわる歴史について紹介する。

『日本書紀』では、「巻第一 神代の部」の「22 ^{あめのいわや}天岩屋戸」において、「^ひ梭」が出てくる。「梭」は「杼」であり、一般にシャトル（緯糸を通す道具）を指すが、当時使われていた織機は「^{げんしばた}原始機」と呼ばれる原始的なもので、織り手が経糸を腰当てなどで引っ張り、大きな杼（後述の「^{とうじよ}刀杼」）で緯糸を通し、箴の代わりにこの杼を使って緯糸を経糸に詰めていた。つまり、ここでは「梭＝箴」の意味で使われている（『古事記』では「おさ」の表記がある）。^{あまてらすおおみかみ}天照大神が

箒とゆかりがあるのは、「天岩屋戸」の記述からもうかがわれる。以下、長文になるが、該当箇所を福永武彦による訳文から引用してみたい（福永武彦訳『古事記・日本書紀』河出書房新社、1984年、214-215頁）。

アマテラス大神は、川添いの狭い田と長い田とを、自分の田として耕していた。すると、スサノヲ尊は、春には、すでに種子を蒔いてある田に行って、その上に種子を蒔いたり、姉君の田を横取りして自分の物のような顔をしたり、畔を壊して水を流し出してしまったりした。また秋には、稲の実った田の中に、斑色をした馬を放して、せっかくの収穫をめっちゃめっちゃにしてしまった。また、アマテラス大神が、その年の新嘗を祭るのを見ると、その神聖な御殿にこっそり糞をして廻り、また、姉君が神に献上するための衣を織る、斎服殿にいるのをうかがい見ると、斑色をした馬の皮を、生きながら逆剥ぎに剥ぎ、御殿の屋根に穴をあけてその中に投げ込んだ。これを見たアマテラス大神は、びっくりして身を避けるはずみに、機具の梭で身体を打ち、怪我をしてしまった。あまりのことに、姉君もすっかり憤慨し、天岩屋の中にはいると、岩戸をぴったり閉めて閉じ籠ってしまった。

この話には「別伝」があり、上記の話と少し違う。ここも引用してみよう（福永武彦訳『古事記・日本書紀』、216頁）。

アマテラス大神の妹君と伝えられる稚日女尊（ワカヒルメノミコト）が、斎服殿にいて、神に献上する衣を織っていた。スサノヲ尊はこれを見ると、斑色をした馬を生きながら逆剥ぎに剥いで、御殿の中に投げ込んだので、ワカヒルメノ尊は驚いて機具から転がり落ち、手にしていた梭で身体を突いて、そのためにこの世を去った。そこでアマテラス大神は、スサノヲ尊を咎めて言うには、「お前は疚しい心はないなどと言ったが、これで見ると、なお異心を隠しているようだ。もうお前の顔なんか見たくもない。」こう言って、天岩屋にはいって岩戸を閉じてしまった。

こうして、昼と夜との区別がなくなり、この世は真っ暗闇になった、という話は有名である。



参考：写真の原始機では、織り手が経糸を腰当てで引っ張り、

箴の代わりに大きな杼を用いていた

（十日町市博物館「常設展示室 織物の歴史」にて文責者撮影）

箴を神体とする吉見神社

くわえて、時代は下るが、地方の風土記や地誌などにも箴に関する記述がみられる。日本を代表する民俗学者の柳田國男  が「イタカ及びサンカ」において、サンカ  とクグツ  がおなじ系統であることを証明するために『松屋筆記  』巻 65 の記述を引用し、クグツと箴の関係について説明を加えている。『松屋筆記』によると、関東で箴を製作する者を久貝都と言ったらしいが、箴を製作しながら漂民として生計を立てており（柳田國男『柳田國男全集』4、筑摩書房、1991年、470頁）、当時竹を使って製作された箴の技術は進歩的なものだったことが想像できる。

また、日本には箴にまつわる神社が存在している。埼玉県熊谷市

相上にある吉見神社である。創建年は不詳であるが、天照大神にゆかりのある箴を神体として天照大神を祀っていると伝えられている（埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉の神社 大里・北葛飾・比企』埼玉県神社庁、1992年、484頁）。



多々石 於佐波幾神社

（写真：南会津町教育委員会）

福島県南会津郡南会津町の多々石地区にある於佐乃波幾神社もそうである。この神社は、『日本書紀』に登場する女神の鹿茸津姫^{かあしつひめ}  を祀ったものであるが（「巻之 43 会津郡之 16 「古町組 多多石村」会津藩地誌局編『新編会津風土記』万翠堂、1901年、67頁）、多々石村の鎮守となり麻織物の神様として箴剥氏^{あめのかみ}  を

祀っている神社でもある（伊南村史編さん室編『伊南村史』第1巻通史編、南会津町、2011年、230-231頁）。

箴と関係の深い機織りの神様を祀った神社もあり、静岡県浜松市浜名区にある初生衣神社^{うぶきぬ}は、天岩屋に籠ってしまった天照大神を外に連れ出すために織られた絹織物「神御衣」^{かみみそ}をつくった、機織りの神・天棚機媛命^{あめのたなはたひめのみこと}（別名あるいは子孫の天八千千比売命^{あめのやちちひめのみこと}）を祀っている。天棚機媛命と天八千千比売命は同一人物であるかどうかはわかっておらず、天八千千比売命は天棚機媛命の娘、あるいは孫という説もあるが、機織りの神様に間違いはない（菅田正昭『現代語訳 古語拾遺』KADOKAWA、2014年、39頁、44-45頁）。この神様を祀る神社は、日本の織物産地にいくつかあり、たとえば、群馬県桐生市川内町にある白瀧神社は、天棚機媛命と京都から織物の技術を伝えたと言われる白瀧姫を祀った神社である。その他にも、絹巻神社（兵

庫県豊岡市）や春日神社（奈良県磯城郡）、服織田神社（静岡県牧之原市）などがある。

とうじょ 刀杼から箴へ

織機の歴史は、人間が狩猟採集をおこなっていた遊動生活から農耕の開始による定住生活へ移行した約1万年前まで遡る。日本では、



参考：アイヌの人びとがアットゥシ（樹皮衣）
をつくる際に利用した地機（居座機）の箴
（赤枠の部分）
（旭川市の川村カ子ト記念館にて筆者撮影）

弥生時代以降に本格的に織物が発展したとされており、各地域の遺跡から出土した遺物や『日本書紀』などの史料から、その内容がある程度わかっている。

織物をつくる際に使用された織機は、原始機から地機、そして高機へと時代をへて進化を遂げてきた。箴に着目すると、現在われわれのよく知る、

いわゆる「箴」は、大陸から渡来した人びとによって伝えられた、腰をかけて布を織る高機が登場してから使用されるようになった。高機の普及は、江戸時代に西日本を中心に綿作がさかんにおこなわれるようになり徐々に進んだが、地域によってばらつきがある。

高機以前は、地機、さらにその前は原始機で織物がつくられており、原始機的时候は「刀杼」という道具を使って経糸に緯糸を打ち込んでいた。地機では、「管大杼」（あるいは、「くたおおひ」とも呼ぶ）という、大きな杼が使われていた（大阪府文化財センター日本

民家集落博物館「はたおりの歴史展：古代の織物生産を考える」『カルチュアはっとり』No.8、2006年2月11日、8-1頁；長井亜弓「紡織用具」神奈川県国際常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書』9、2015年3月、415頁）。



参考：写真の地機では、竹箴が使われている（赤枠の部分）

（十日町市博物館「常設展示室 織物の歴史」にて文責者撮影）

箴の多様な使い道

箴は、主として織機の道具（部品）として使われているが、整経の際にも重要な役目を果たしている。この使われ方は古くからあり、古代エジプト時代に経糸整経・幅出し具（幅出し箴）が存在したことがわかっている。中国では紀元前8～5世紀頃である。幅出し箴は、われわれの知る「箴」の原型であり、やがて幅出し箴と刀杼の機能が統合され、刀杼は使用されなくなったのではないかと推察されている（加藤忠一『金箴および箴屋』ブイツーソリューション、2007年）。現在は整経機に箴を装着し、経糸に畦を組むために利用されている。今治では「伸べ箴」と言われており、一般には「綾取り箴」とも呼ばれる。

平和金箴製作所では、数は少ないが「伸べ箴」のオーダーも受ける。織機用箴と同様に、現在はステンレス製のものが使われている

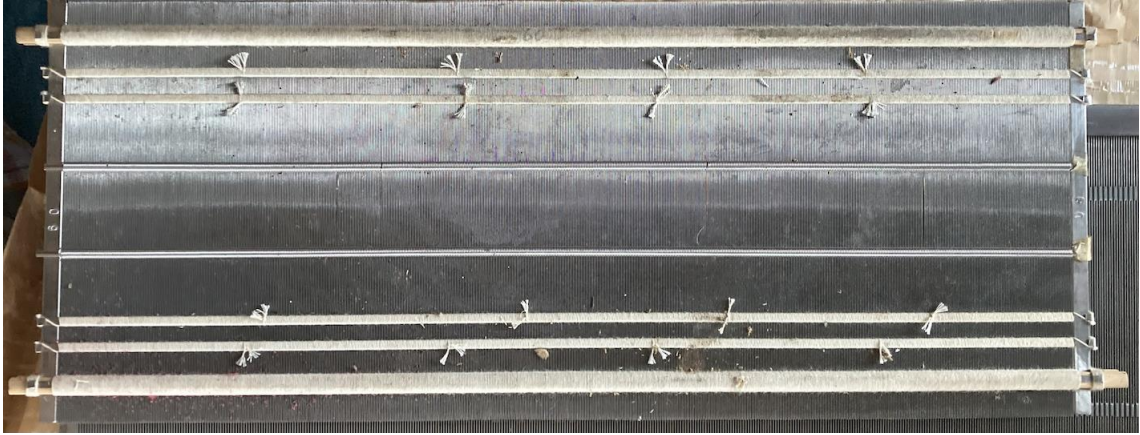
が、長さは織機用箴に比べると短い。しかし、整経機の規模によって異なり、短いもので50～60cm、長いもので100cmほどである。



伸べ箴は織機用の箴と比べて短い



箴にも番手があり、写真の伸べ箴は38番手のもの



完成する前の工程で、1羽を2羽に結合する部分を糸で巻いて固定する



参考：（株）武智商店の工場に設置してある整経機



整経機の箴の部分

糸の太さによって、箴目（箴の間隔）と箴の強度は違う。箴目は箴の目数によって決まるが、整経機の場合、たとえば38番手綿糸の場合、目数は2,500となる。強度については、糸が太くなるにつれて箴も強度を増す。糸と同じように箴も「番手」が用いられており、番手の数が小さくなるほど強度が高い。たとえば、38番手綿糸では箴は70番手、50番手綿糸では箴は90番手という具合である。

（次号につづく）

